

「古代は壹與に始まった」

序

ゴリゴリの九州説である私は、邪馬壹國のある九州が何故卑弥呼時代から衰退し畿内が急速に発展して行くのか、その答えを持っていなかった。ある日卑弥呼と壹與の間に深い断絶を感じた。すると歴史が繋がりはじめた。

倭国を作ったのは越人である。漢委奴国王、倭国王帥升、卑弥呼も越人であり、論衡、山海経の倭人も越人である。紀元前473年に越王の勾踐は呉の夫差を滅ぼし、山東半島南側の青島市の西南まで北上して琅邪山を都とした。そして華北、華南を繋ぐ貿易港として栄えた。紀元前333年頃今度は越が楚に滅ぼされると、越人達は各地へ四散して行った。航海上手の越人達は、朝鮮半島南部や九州北部へと移住して来た。同じ亜熱帯気候の倭国は住み易く、人の少ない海岸線の高台に住みつき次第に占有して行った。福岡県春日市の須玖岡本、タカウタ遺跡を造ったのはこの委奴国と呼ばれた越人達である。

卑弥呼時代に衰退した委奴国の越人勢力は対馬へと退却し、倭国の実権は縄文人の手に戻って来た。倭国の始祖王は縄文人の壹與である。記紀に卑弥呼の記述がないのは越人だったからであり、記紀は倭人政権のための史書なのである。

目次

- 1 其北岸狗邪韓國
- 2 漢委奴国王
- 3 當在會稽東冶之東
- 4 世有王皆統屬女王國
- 5 委の歴史
- 6 始祖王壹與

1 其北岸狗邪韓國

紀元前韓半島南部には多くの縄文人が先住していた。この縄文人達は、7300年前の鬼界カルデラの噴火で西日本一帯が火山灰に覆われたため、新天地を求めて移住して来た縄文人の末孫と思われる。韓国釜山の東三洞貝塚は5個の文化層に区分され、放射性炭素年代測定の結果7500年前から3500年前までの約4000年間に形成されたものと推定されている。土器、石器、骨角器、儀礼用具の中に縄文土器や九州産の黒曜石も多数出土している。

狗邪韓國の住人はこの倭人と越人達の連合体である。「其戸數道里可得略載」がないので倭地ではないという意見があるが、短文の名人陳寿は、「大海之中」と「之」の一文字を特別に増やし、日本列島の倭人に限定している。裏を返せば、韓半島南部にも倭地があったからと考えるべきだろう。後漢書の范曄は、「其西北界狗邪韓國七千餘里」と倭地としている。中国青島市、半島南部、九州北部と広いネットワークを持ち、海上活動をしていた越人だからこそ、中国王朝に対しても俊敏で適切な対応が出来たのであり、「循海岸水行」も彼らの導きである。

景初元年公孫淵討伐のため明帝が船の建造を始めた時その情報はすでに狗邪韓國に伝わっており、越人達は公孫淵討伐の勝利を確信していたのである。少ない貢物は戦時中につき最小限に抑えられたと考えるべきで、明帝の景初二年である。紀元前の倭人の権力の中核はこの狗邪韓國にあり、57年以後は交易の中継および情報収集の役割を担った。卑弥呼の時代でも狗邪韓國が司令塔なのである。

2 漢委奴国王

漢の武帝の連年に及ぶ征服政策のため武帝が死亡した前87年には人口は激減し、農業生産は落ち込み散々な状況となっていた。王莽時代には六千万、後漢の光武帝が14年かけて統一した時には一千五百万人である。人材不足に悩む後漢の光武帝は、前30年半島東部の嶺東七県を放棄し濊貊の長に委託した。また真番の故地は韓人の廉斯を交易の窓口として特権を与え

た。倭人に対しても同様で、半島南部と九州北部にの海域に勢力を持つ委奴国の長を代表にし、窓口を一本化した。漢委奴国王は倭国王ではないが、当時の倭国内ではこの委奴国の勢力は最大だった。この制度は中国側の経済的な事情によるもので、委奴国が政治的に成長して勝ち得たものではない。倭国王と記載されたのは107年の帥升である。この帥升が狗邪韓国から九州北部のへと南下し、倭国統一をしたと考えている。井原鍵溝遺跡が該当するのだろう。

184年黄巾の乱が勃発すると漢委奴国王の制度も壊れた。成長してきた諸国の王達は独占禁止を唱え、福岡市西区の今津湾の権益争奪戦になった。長引く戦から話し合いが持たれ、「共立一女子爲王 名曰卑彌呼」が倭王となって終結した。卑彌呼は宗教的な存在で、実際は「男弟佐治國」が王であった。男王では終結出来ないための応急手段である。共立された宗教王に強い権限があるはずがない。いつの時代でも現実には男社会である。

委奴国は広形銅矛祭祀を行っていた。ところが福岡市では墓からの出土はなく、人里離れた谷間などから出ている。これは委奴国における越人の数が少なかったからではないだろうか。対馬では墓の中に埋葬されているが、鋳型は出ていない。あくまでも完成品としてであり、春日市から対馬へ持ち込まれた物である。他には大分、愛媛、高知南部からの出土があり、これが委奴国の共同祭祀勢力である。高地南部では現在でも広形銅矛祭が行われている。「女王國東渡海千餘里 復有國」は四国である。

委奴国の王墓は連綿と続いている。(吉武高木遺跡—須玖岡本遺跡—三雲遺跡—一貴山銚子遺跡と山頂)の関係を見てみると、「緯度33度」の直線上にきちんと並んでいる。同じ信仰を持った人達の遺跡である。東は宝満山、西は飯盛山であり中心である。

三雲遺跡	緯度	33度 32分 00.24秒	
須玖岡本遺跡	緯度	33度 31分 57.05秒	
吉武高木遺跡	緯度	33度 32分 02.54秒	
宝満山	緯度	33度 32分 23.00秒	
飯盛神社	緯度	33度 32分 5.77秒	
一貴山銚子塚古墳	緯度	33度 31分 58.79秒	「大宰府・宝満・沖ノ島」伊藤まさこ著

【糸島三雲遺跡は伊都国ではない。委奴国である】

3 當在會稽東冶之東

漢書地理誌 「樂浪海中有倭人、分爲百餘國、以歲時來獻見云」

陳寿は樂浪郡を帯方郡に変えている。これは公孫康が置いた帯方郡を司馬懿が配下に治め、これによって卑彌呼の使者が朝貢した事を倭人伝の出発点としたためである。この時代の史書は儒教枠内にあり、まだ自立していない。史実を伝えるよりも、王朝継承の正当性を唱えるために存在していた。中国は、天下の大きさを儒教經典で定めていて、方三千里から方一万里へと変化して来ている。陳寿は儒教の教えに背いたとして二度の失職をしている。倭人伝は儒教の影響を大きく受けているのである。

「計其道里 當在會稽東冶之東」 (まさに會稽東冶之東に在るべし)

これが倭人伝の主文である。蜀の背後にある大国「親魏大月氏」。「親魏倭王」も呉の背後の海上にある大国であるはずであった。陳寿は倭人が言う「自謂太伯之後」を記載できない。記載すれば敵国呉と倭人が同祖になり、孫呉の背後の脅威としての倭国が崩れる。後漢書では「大較在會稽東冶之東」と記されているが、陳寿はここでも「大較在」(おおむね)を「當在」(まさにある)改変し強調している。陳寿は晋の開祖としての司馬懿の功業を宣揚するために、倭国を孫呉の背後の脅威として東南海中の大国に描いた。それと同時に曹魏の方針が、西の大国である蜀の背後にある大月氏と同様に、倭国の存在を押し上げていた。

倭人伝にある「奴國、不彌國、投馬國」は他の史書に記載がない。そして魏略は伊都國で終わっている。倭人伝の伊都國も「到」が使われ目的地である。

廣志「イ妾國東南陸行五百里、到伊都國、又南至邪馬嘉國、百女国以北」

雍公叡は翰苑注において「漢書地理誌、後漢書、魏略、魏志」を引用しているが、何故か邪馬壹國については廣志を使って注引している。おそらく邪馬壹國の位置が簡潔に記されていたのだろう。伊都國から距離のない「又南」と連続して邪馬壹國が

記載されている。魏使の目的地は伊都國であり、南に隣接して邪馬壹國があったことになる。「奴國、不彌國、投馬國」は行路外の国々であり、他書が引用するはずがない。「奉詔書印綬詣倭國 拜假倭王」魏使は卑弥呼と対面している。平原にいた卑弥呼が伊都国の迎賓館まで出向いたと思われる。



しかし陳寿はそのまま記述できない。それでは最終目的である「會稽東冶之東」に遠く及ばない。一計を案じた陳寿は、伊都国の東側にある行路外の三ヶ国の記事を伊都國に繋げ、邪馬壹國との間に差し込んだ。そして「水行十日 陸行一月」の記事を使い、その距離を曖昧に表現した。この情報は266年の朝貢時の情報と推理する。倭国使が九州北部から帯方郡に至る行程の報告記録と思われる。范曄はこれに気付き、「樂浪郡徼去其國萬二千里其西北界狗邪韓國七千餘里」と倭国を始点とし帯方郡を到着地として逆に描いた。しかし陳寿はウソを書いていない。大鴻臚にあらかじめ整理されていた原資料を都合よく編んだのである。

4 世有王皆統屬女王國

歴代の伊都国王は全員が女王国に従属して来たと言われている。伊都国王「個人」が女王国という「国」に従属している。この関係は天皇家と伴造氏族と同じ関係にある。伊都国王は、漢委奴国王、倭国王帥升、卑弥呼と連続して従属して来たと思われる。同じ原史料で編纂された魏略にこの記載はない。魏略にはなく魏志にあるのは266年の朝貢の際の情報と考えられる。また女王国に仕えて来たと言っていると、伊都国の記載内容や地形からしてその役割は海上活動である。女王国とは何処か？この時代に女王国と分るの、委奴国以外には考えられない。委奴国と思われる春日市の工業化は、この時代は他国を圧倒している。

島伝い航行しかできなかった時代に壱岐から伊都国まで監視し、津に必ず行かせるための守備としては、唐津呼子から津屋崎までがその範囲となる。海流は東北向きなので、壱岐と津屋崎が特に重要である。この宮地嶽神社を中心とする津屋崎古墳群一帯が「不彌國」であり、後の時代までそれ相応の遺跡、出土品がある。また一大國と共に「家」表記があり海軍を思わせる。宮地嶽神社は宗像徳善ではない、阿曇族の本家であり志賀海神社の兄貴分である。

【 伊都国王とは、委奴国王統に古くから追従して来た海人族の棟梁である 】

この海人族が、後の「阿曇氏」となって行くのだろう。したがって越滅亡時の四散と同じように、阿曇族も全国へと散らばって行った。

魏志倭人伝「副曰泄謨觚 柄渠觚」觚（こ）とは爵（しゃく）とセットで用いられた祭祀用の飲酒器である。商代前期に出現したが、そのうちに爵と必ずセットになり、商代後期に最も盛行した。下半分は上げ底で、外反した部分が足である。上方に向かってラップ形の口が大きく開く。「觚」は職名であり、外交官、接待役である。「郡使往來常所駐」とあり、梯儁等、張政等もここに滞在した。伊都国とは繁栄している港であるのに有千餘戸と少ない。これは住人の殆んどが海人族であり、今津湾の沿岸付近の狭い地域である。伊都国にある迎賓館での接待が觚のついでの人達の役目なのである。

一大率は、旧唐書「置一大率、檢察諸國、皆畏附之」、新唐書「置本率一人、檢察諸部」。大率＝本率であり、大率は中国の観念的表現である。卑弥呼共立以前の諸国の王を表したと考えている。すると複数の大率の中の代表的な一人となる。特別に置いた一大率が、伊都国で常に治めている。「特と常」は相反する。常に治めているのは旧伊都国王であり、一大率は特別に置いたのである。ここから導き出される結論は、旧伊都国王を特別に一大率に任命したことになる。陳寿は女王国と伊都国のこの密接な関係を加筆したのである。官をあてる意見もあるが對馬國の大官で否定される。一大率は魏使来倭の行程内にある以北の国々を「檢察諸國 諸國畏憚之」しているのである。すなわち為政者側の越人勢が、縄文人の諸国を威嚇しているのである。

戦争の図式は、は「越と縄文」である。卑弥呼の宿敵「狗奴國男王卑彌弓呼」は縄文人であり、勢力の衰えて来た委奴国越人を追い出すために戦争を仕掛けたのである。同じ縄文の「壹與年十三爲王 國中遂定」で和解となった。そして狗奴國の裝飾古墳が飯塚のを指して年々北上し、王塚古墳で開花するのである。

5 委の歴史

漢書地理誌 「樂浪海中有倭人、分爲百餘國、以歲時來獻見云」

唐代の史家の顔師古が注を書いている。

如淳曰「如墨委面、在帶方東南萬里」

臣瓚曰「倭是國名、不謂用墨、故謂之委也」

師古曰「如淳云如墨委面、蓋音委字耳、此音非也 倭音一戈反 今猶有倭國」

魏の如淳は倭人を「如墨委面」と書いた。文章上は主語で倭国の別称であることは間違いない。漢時代の倭国の別称を東晋の臣瓚はすでに理解していない。臣瓚は注でこの国を「委」(イ)と言ったとしている。唐の顔師古は、如淳の如墨委面の「委」は認めても、臣瓚の「倭=委」を否定した。倭の音はイではない「ワ」である。現に今でも倭国があるではないかとしている。しかし「蓋」(けだし)(思うに・・・であろう)を使って自信のなさが表れている。倭は「ワ、イ」と読めるが「委」はイでありワとは読めない。それを臣瓚は、「倭を委」に置き換えているのは、晋時代までは同じ「イ」の音であったことを証明している。唐時代には、イの音はすでに忘れ去られ「ワ」以外には考えられなかったのである。委奴国の委(イ)は、おそらく「東の人」を表した古い時代のものだろう。「委奴国、邪馬台国、邪馬壹國、邪馬臺国、倭国」共通しているのは「イ」の音である。隋書の裴世清は、秦王国を夷州と疑っている。これはその地名に「イ」が付いていたからである。倭人伝では不彌國に該当する。

范曄は、何故壹から臺へ改変したのだろうか。それは倭讚が自国を「タイ・イ」(大委)と発言していたのではないだろうか。聖徳太子自筆とされている法華義疏に「大委国上宮」の記述がある。委奴国王、帥升、卑弥呼の越人の「委」は、縄文人壹與に受け継がれ「大委」として倭の五王、聖徳太子へと受け継がれて来た。それを隋書は「倭国」と書き表した。裴世清が達した名も無き「經十餘國達於海岸」は遠賀川の行き止まりの海岸であり、会見した倭王多利思北孤は筑豊地域に居たと思うのである。

卑弥呼の宮殿は糸島市蔵持の南にあった。しかしここは倭人伝にある邪馬壹國ではない。卑弥呼は邪馬壹國の女王ではない。卑弥呼は女王国と表された委奴国の後継者であり、三雲遺跡、平原遺跡の近くに居たのである。蔵持とは古くは「車持部」であり、履中天皇が筑紫の車持部の権利を取り上げたという記録が残っている。現在で言うと国土交通省長官になるのだろうか。その隣に平原遺跡があり、蔵持の南側に卑弥呼の宮があったのではないだろうか。

倭人伝の邪馬壹國は壹與の都であり飯塚市にあった。この邪馬壹國は梯儻でなく張政の報告書によるものであり、張政の時の倭女王は壹與である。糸島地域にある頭に「イ」の付く地名が飯塚市にも大集結している。卑弥呼以後、筑豊地域からは他地域とは比べ物にならないほど多数の素環頭太刀の出土があることから考えると、倭国の権力の中核は飯塚に移ったと思われるのである。そして陳寿は越人が作った国に琅邪の「邪」を使い、その出自を表した。狗邪韓國も同じ勢力である。

親魏倭王でありながら「死の表記された惑わす卑弥呼」と「衆望に諧う壹與」との間には深い断絶を、私は感じる。

6 始祖王壹與

紀とは本来編年体で書かれているはずである。日本書紀の舒明天皇から昭和天皇実録に至るまですべて編年体であり実録である。読んで字の如く年を編むのであり、在位期間と年次記事数は同じになる。ところが神武天皇から推古天皇の間はスカスカの状況である。日本書紀は持統天皇讓位697年で終わり、古事記は推古天皇で終わっている。書記の年次数は451年分ある。もし最初に編年体で編纂した書紀を神武天皇即位BC660年まで引き延ばしたと考えると、持統天皇讓位から451年分の記事数を引けば、本来の始祖王が判明するのではないのか。「697-451」は、卑弥呼死亡、壹與即位が該当する。壹與の名は「壹國のヨ」である。この「国名+一字名」の表記は倭の五王「倭讚」へと続いて行く。

さらに研究を進めて行きたい。

参考文献

倭国	岡田英弘
魏志倭人伝解説	生野真好
日本国成立の日	生野真好
魏志倭人伝の謎を解く	渡邊義浩
邪馬台国の全解決	孫 栄健